幼児が高齢者に親しみを持つための絵本の活用

青木　聡子

キーワード：幼児，高齢者，世代間交流，保育，絵本

1．問題と目的

令和４年10月１日時点の我が国の65歳以上人口は，3624万人で、総人口に占める割合（高齢化率）は，29.0%となった（内閣府，2023）。『幼稚園教育要領解説』（文部科学省，2018，p.181 ）には，幼児が高齢者と積極的に関わる体験を持つことが望ましいとされているが，多くの幼児の祖父母はまだ若く，家庭で高齢者と交流する機会を持つことは難しい（青木，2022；青木，2023）。ところが，保育を専攻する短期大学の２年生と保育者は，領域「人間関係」に関し，共に「高齢者や地域の人々への親しみ」が最も「保育実践において取り上げるのが難しそうだ」と感じ，学生の場合には最も「内容について知識が不足している」ものとしても同内容を挙げていることが報告されている（太田，2018）。そして，保育における世代間交流に抵抗感を覚える背景には，保育者自身が，高齢者と関わる経験に乏しい実態があるという（徳田・請川，2021）。

では，これから社会に出る学生達は，高齢者に対しどのようなイメージを持っているのだろうか。坂井（2018）は，幼少期に高齢者から世話になった頻度が高い学生ほど，高齢者に対する偏見がなく，肯定的なイメージを持っていることを報告している。これは，高齢者という属性をもった一人の人格としての“○○さん”との関係が築かれているためだと考えらる。動画視聴による認知症の一人称体験が高齢者のイメージを「尊敬できる」「経験が多い」というイメージへと変容させることも報告されており（南崎・佐々木・叶谷，2023），当事者の視点で高齢者の生活について知ることが，高齢者の特性への理解を促し，肯定的なイメージを持つことに繋がるのだと考えられる。

祖父母との関係に焦点を当ててみると，児童期以前に祖父母との交流頻度が高かった学生は，祖父母からケアされたという体験の積み重ねを通して，高齢者の人格や精神面における能力，高齢者の活動性や自立性，高齢者自身の幸福感に関する要素，社会へ向かう積極性をそれぞれ高く認識していることが報告されている（松山・安永・草野，2014）。同様に，祖父母と同居しており，かつ世話を受けた経験を持つ学生（畔津・金・吉永，2018）や，中学卒業以前の祖父母との関係のなかで，自分の存在を受容してもらったり，祖父母の姿を通して自分に命が引き継がれていく実感を持ったりした学生（福江・福岡・荒井, 2020）は, 高齢者に対してよいイメージを持っているという。このように，継続的に関わりやすい祖父母との交流では，高齢者に対して肯定的なイメージを持つ上で重要な，対面して内面に触れる経験（三輪・金原，2015）をし易いと考えられる。

小嶋・孫・中嵜・劉・弘津・徳田・長谷川・吉村（2022）によれば，大学生の多くが自身の祖父母を基に高齢者をイメージしており，次いで地域の高齢者，メディア等の高齢者の順に影響を受けていた。祖父母との連絡頻度の多さ，地域の高齢者との楽しい活動経験や習い事・講習の経験，メディア等を通じて敬老内容や介護内容を見た経験が高齢者への肯定的なイメージ形成に関連していることから，様々な形で世代間交流の機会をもつことが有効であると言える。

幼稚園で高齢者との世代間交流を行う場合，その相手は主に地域の高齢者ということになる。幼児にとっても保育者にとっても馴染みが薄い高齢者との交流に際しては，高齢者に関する絵本の読み聞かせを行うことで，高齢者に関心を持つことや，その特性に応じた関わり方を考えるきっかけになる可能性がある（青木，2022；青木，2023）。幼児にとって身近な媒体である絵本で，多様な高齢者の姿に触れることやモデルとしての保育者の高齢者に対する反応に触れることは，高齢者に対するイメージ形成に少なからぬ影響を及ぼすことが予想される。

そこで本研究では，幼稚園教員免許を取得予定の学生が高齢者に対しどのようなイメージを持っているのかについて分析を行う。その上で，幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたいと思えるようにするには，どのような絵本が有効だと考えているのかについて，それぞれが選んだ絵本の選書理由を分析することに

より明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 研究協力者

本学の幼児教育関連科目のうち，人との関わりに関する領域「人間関係」または，身近な環境との関わりに関する領域「環境」に関する科目を履修し，研究協力への同意が得られた学生 32 名分の小レポートを分析対象とする。

2.2 倫理的配慮

学生に対して文書と口頭で研究の趣旨を説明し，協力を求めた。その際，個人名は伏せること，研究への協力は任意であり，授業等で利益・不利益が発生するものではないことを説明し，同意書をとった。

2.3 小レポートの質問項目（3 項目）

小レポートには，「1. あなたは，高齢者に対してどのようなイメージをもっていますか。」「2. 幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたい，関わりを継続したいと思えるようにするために，幼稚園で読み聞かせるとよいと考えられる絵本を挙げてください。（タイトル／作者名／出版年／出版社）」「3.「2」の絵本を選んだ理由を，授業の内容を踏まえて 1 冊につき 150 ～ 400 字で書いてください。複数挙げた方は，番号をつけて「2」と対応させてください。」の 3 つの質問項目を設け，それぞれ，自由記述での解答を求めた。なお，質問 1 では 147 文，質問 3 では 126 文が得られた。

2.4 分析の手順

学生自身が高齢者に対しどのようなイメージを持っているのか，また，幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたい，或いは，関わりを継続したいと思えるようにするために，幼稚園でどのような絵本を読み聞かせるとよい考えているのかを探るため，テキスト型データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである KH　Coder3 を用いて計量テキスト分析を行った。

まず，ワークシートの記述内容をテキストデータに変換し，形態素解析エンジンに ChaSen を指定して抽出語リストを作成した。次に，表記揺れを確認し，複数の表現が存在する語に対して表記ゆれ吸収のプラグインを用いて統一した（例えば，子，子供は「子ども」に，本は「絵本」に，男の子は「主人公」に統一した）。そして，出現パターンの似通った語を線で結んだ共起ネットワーク図を作成した。なお，本研究のデータは，一つのワークシートに含まれる語の数が少なく，それぞれの語が一部のワークシートにしか含まれていないため，共起関係の絞り込みには Jaccard 係数を使用した（樋口，2020，p.180）。

3. 結果と考察

3.1 大学生の高齢者に対するイメージ

表 1 は，大学生の高齢者に対するイメージのうち，出現回数 3 回以上の頻出語のリストである。再頻出の「人」は，「～な人／～している人」という文脈で用いられることが多く，高齢者を自分には関わりのない存在としてではなく，関わりを持つ相手として捉えていることがうかがえる。また，次いで「知識」という語が多いことから，高齢者を敬意の対象として捉えている者が多いことがわかる。

表 1　大学生の高齢者に対するイメージの頻出語上位 43 のリスト（出現回数 3 回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	17	知る	5	人生	3
知識	12	認知	5	衰える	3
多い	10	話	5	生きる	3
イメージ	8	使う	4	遅い	3
曲がる	8	自分	4	着る	3
経験	8	存在	4	長い	3
腰	8	体	4	低下	3
弱い	8	白髪	4	不自由	3

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
杖	7	不安	4	聞こえる	3
必要	7	話す	4	歩く	3
足腰	6	運動	3	人生	3
優しい	6	穏やか	3	衰える	3
健康	5	階段	3	生きる	3
高齢	5	好き	3		
生活	5	少ない	3		

学生が，高齢者に対してどのようなイメージを持っているのか，共起ネットワークによって語と語の結びつきの強さを示したのが図 1 である。語の出現数が多いほどそれぞれの語を表す円が大きく，強い共起関係ほど濃い線で結ばれている。各線の上に表示されている数字は Jaccard 係数であり，大きいほど強い共起関係にあることを意味する（樋口，2020，p.185）。以下では，同じグループに属することを意味するサブグラフ毎に考察を行い，サブグラフの解釈を【　】で示すこととする。同じサブグラフに属する語同士は，実線で結ばれている。

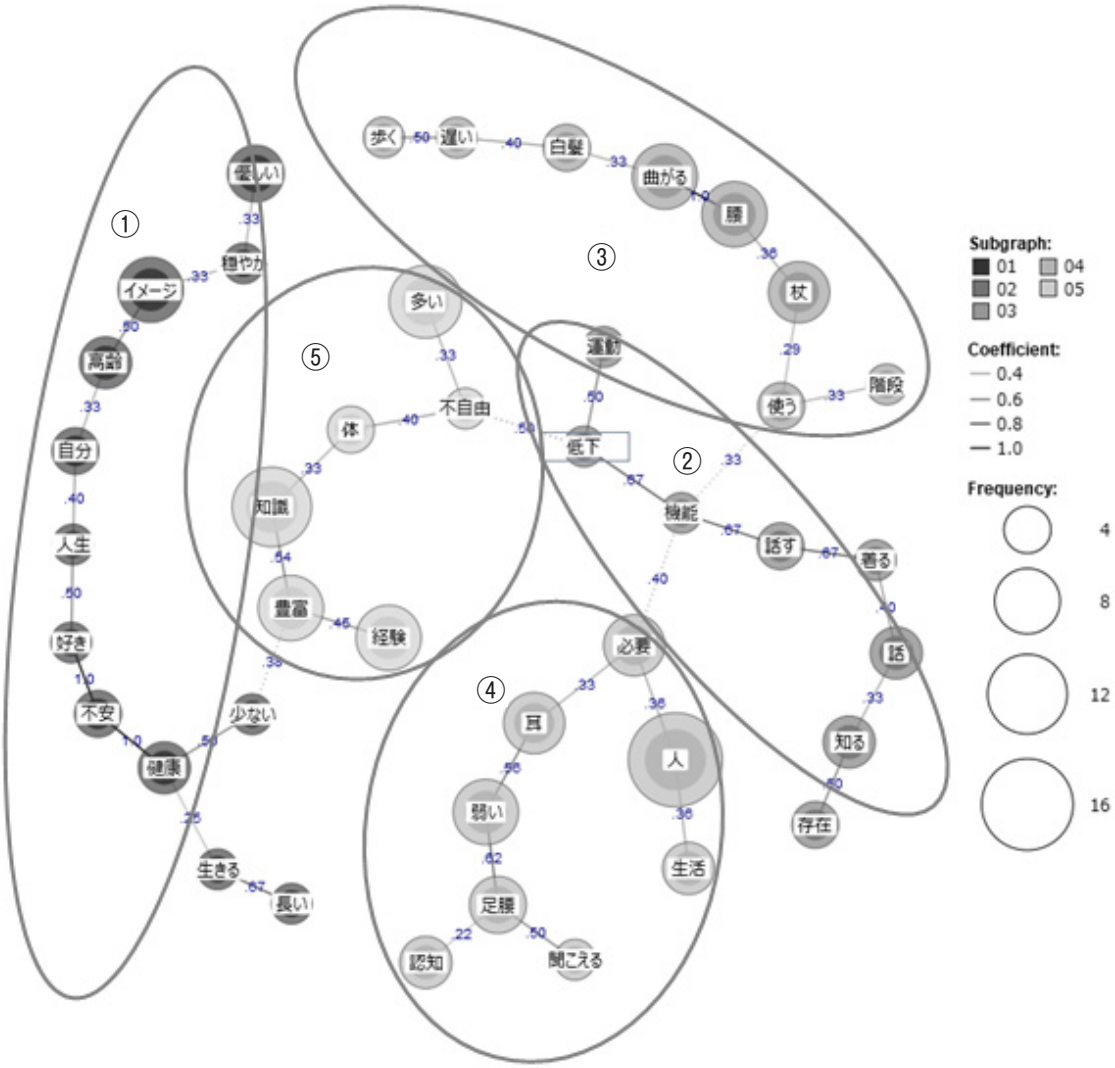

図 1　大学生の高齢者に対するイメージの共起ネットワーク

サブグラフ①には，「健康」面での不安や，収入や交流が「少ない」といったネガティブなイメージが含まれる一方で，「優し」く「穏やか」で，「好き」なことをしているといったポジティブなイメージも連なっていることから，【ポジティブとネガティブ両方のイメージ】を抱いているといえる。高齢者のことを，ポジティブとネガティブ，どちらかに偏ることなく，多角的に捉えようとする視点を持ち合わせていることは，教員となった際の実際の交流活動において，高齢者のありのままの姿を受け止めて関わる姿をモデルとして幼児に示す上でも重要であると考えられる。高齢者の多くは医療機関に入院せず，かつ頻度が高く通院はしておらず（細田・穆・横山・徳嶋・大西・大谷・黒沢，2014），生活実態は様々であることから，大杉（2023）が指摘するように，一方的に支

援を受けるだけの存在として捉えず，多様性に富んだイメージを持てるようにしたい。

サブグラフ②からは，「運動」能力や感覚・認知「機能」の「低下」がみられたり，いろいろなことを「知る」だけに「話」が長かったり，同じことを繰り返したりすることなどから，配慮が必要な「存在」として捉えていることが示されている。よって，【衰えているため配慮が必要な存在だというイメージ】をもっていること意味していると言える。相手の特性を踏まえて関わることは大切であるが，交流活動に際しては，受け手である高齢者の自尊心を傷つけたり，力が発揮できないような状況を生み出したりすることのないよう注意したい。

サブグラフ③には，「歩く」のが「遅」く，「白髪」があって，「腰」が「曲が」り，「杖」を「使う」こと，「階段」の昇り降りが大変であるといった【身体機能が衰えているイメージ】であることが示されていた。これは，授業のなかで，幼児と交流を行う「高齢者」として「高齢期に特有の課題を抱える者全般を想定」（内閣府，2018）するよう指示したことが関係していると考えられる。実際の交流活動の前には，外見からは分かりにくい，認知的側面についても目を向けられるようにする必要があることに留意したい。

サブグラフ④には，「耳」が遠くなったり，「足腰」が「弱」くなったり，「認知」機能が低下したりするなどして，介護や介助，手助けを「必要」としている「人」として捉えていることが示されている。よって，【機能が低下して他の人の助けを必要としている存在だというイメージ】であることを意味している。介護や介助といった語からは，一人では日常生活に支障のある姿を具体的に思い描き，社会的サービスの受け手としての姿を想定していることがうかがえる。

サブグラフ⑤は，「体」に「不自由」なところがある一方で，「知識」や「経験」が「豊富」であるといった【獲得と喪失両方のイメージ】であることが示された。つまり，学生たちは，高齢者との世代間交流に際し，どちらか一方が何かをしてあげるのではなく，それぞれが良さを発揮できるような互恵関係を築いていく上で重要な視点を持つことができているといえる。これは，サブグラフ①とは異なり，長い歳月を生きてきたからこそ獲得された内容が含まれるのが特徴である。

3.2　大学生が幼児と高齢者との関わりを促すために選んだ絵本

幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたい，関わりを継続したいと思えるようにするために，幼稚園で読み聞かせるとよいと考えられる絵本を挙げてもらったところ，表２に示すような結果が得られた。

表２　学生が幼児と高齢者との関わりを促すために選んだ絵本のリスト

絵本のタイトル／作者／発行年／出版社	人数
『ありがとさん』作：こんのひとみ／絵：いもとようこ／ 2015 年／金の星社	1
『うさこちゃんのおじいちゃんとおばあちゃん』文・絵：ディック・ブルーナ／訳：まつおかきょうこ／ 1993 年／福音館書店	1
『おじいちゃんがおばけになったわけ』文：キム・フォップス・オーカソン／絵：エヴァ・エリクソン／訳：菱木晃子／ 2005 年／あすなろ書房	2
『おじいちゃんちで おとまり』作・絵：なかがわ ちひろ／ 2006 年／ポプラ社	1
『おじいちゃんの ごくらくごくらく』作：西本 鶏介／絵：長谷川義史／ 2006 年／鈴木出版	3
『おじいちゃんの小さかったとき』作：塩野米松／絵：松岡達英／ 2019 年／福音館書店	1
『おばあちゃん，ぼくにできることある？』さく：ジェシカ・シェパード／やく：おびかゆうこ／ 2019 年／偕成社	3
『おばあちゃんすごい！』文：中川ひろたか／絵：村上康成／ 2002 年／童心社	3
『おばあちゃんとおんなじ』作・絵：なかざわみくこ／ 2018 年／偕成社	1
『おばあちゃんのおうち』さく・え：はせがわ さとみ／ 2020 年／学研プラス	1
『おばあちゃんの小さかったとき』文：おちとよこ／絵：ながたはるみ／ 2019 年／福音館書店	1
『じいじのさくら山』著：松成真理子／ 2005 年／白泉社	1
『だいじょうぶ だいじょうぶ』作・絵：いとうひろし／ 1995 年／講談社	6
『たまごにいちゃんとたまごじいちゃん』作・絵：あきやま ただし／ 2019 年／鈴木出版	1
『どろんこおそうじ』さく・え：さとうわきこ／ 1990 年／福音館書店	1
『ばあばは，だいじょうぶ』作：楠　章子／絵：いしいつとむ／ 2016 年／童心社	1
『ピンクのいる山』作・絵：村上康成／ 2000 年／徳間書店	1
『ぼくのおじいちゃん』作：マルタ・アルテス／訳：よしいかずみ／ 2014 年／ BL 出版	1

3.3　大学生が選んだ絵本の選書理由

表 3 は，大学生が，幼児と高齢者との関わりを促すために幼稚園で読み聞かせるとよいと考えた絵本（表 2）の選書理由について，出現回数 3 回以上だった頻出語のリストである。選書理由を述べる上で，「絵本」「子ども」「高齢」「考える」「思う」は，上位に来ることが必至である。次いで多かったのは，「主人公」「自分」「人」という，登場人物の経験を自分のことに置き換えるような視点を持ち，関わりについて意識できるような内容を意識した語だった。

表 3　選書理由の頻出語上位 96 のリスト（出現回数 3 回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
絵本	71	優しい	7	遊ぶ	4	感じる	11	暮らし	5	思い出	3
子ども	68	理解	7	理由	4	関わり	11	お話	4	持てる	3
高齢	50	言葉	6	いろいろ	3	楽しい	10	たくさん	4	実際	3
考える	34	行く	6	お手玉	3	描く	10	ムーチー	4	食べる	3
思う	34	生まれる	6	お母さん	3	話	10	介護	4	人間	3
主人公	21	多い	6	しなやか	3	教える	9	機会	4	大きい	3
自分	20	忘れる	6	オスカー	3	持つ	9	気付く	4	大好き	3
人	17	学ぶ	5	プレゼント	3	出来る	8	作る	4	伝える	3
読む	17	関心	5	育む	3	生きる	8	場所	4	伝わる	3
選ぶ	16	強い	5	沖縄	3	一緒	7	場面	4	得る	3
知る	16	経験	5	家	3	興味	7	色々	4	日常	3
関わる	14	散歩	5	関係	3	親しみ	7	戦争	4	物語	3
気持ち	14	思える	5	見る	3	身近	7	知恵	4	分かる	3
大切	14	死	5	作品	3	存在	7	知識	4	聞かす	3
認知	12	時間	5	使う	3	孫	7	内容	4	様子	3
遊び	12	不安	5	思い	3	聞く	7	必要	4	絆	3

それぞれの学生が，幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたい，関わりを継続したいと思えるようにするために，幼稚園で読み聞かせるとよいと考えた絵本の選書理由について，共起ネットワークによって語と語の結びつきの強さを示したのが図 2 である。

サブグラフ①には，学生が自身の経験を踏まえて高齢者から「教」わることへの価値づけを行っており，共に「楽しい」「時間」を過ごすこと，高齢者がもつ「生きる」ための「強さ」や，おまじないを含む，知恵としての「言葉」，豊かな「経験」について「知る」ような内容が，高齢者との交流への動機づけとなると考えていることが示された。つまり，【共に楽しい時間を過ごす中で高齢者から学びを得る内容が含まれること】を重視していると言える。これは，主人公が様々なことを教わる姿から，高齢者への敬意を育むことができる絵本でありつつも，ストーリーとしては，高齢者との楽しい時間を過ごすこと軸に置いたものを選ぶことで，交流活動への動機づけを期待したためだと考えられる。

サブグラフ②には，選書理由を述べる際に必須の「絵本」「子ども」「高齢」「考える」「関わる」「親しみ」を「持つ」が連なっていた。特徴的なのが「遊び」という語で，絵本を通じて昔からある「遊び」を取り上げることで，実際の交流活動につなげていこうとする意図が示されていた。よって，【高齢者との交流の核となる遊びが含まれていること】とした。独楽やお手玉，輪投げ，だるま落としなどの昔遊びは，少し練習したり，コツをつかんだりすれば，幼児にも楽しめるものが多いが，初めての挑戦ではうまくいかないものも少なくない。だが，主体的活動としての遊びは，もともと，動機づけを持ちやすい。よって，高齢者が遊びの技を披露するような場面のある絵本は，素直にそのすごさに感動し，尊敬の念や憧れを抱くことに繋がって（青木, 2023），技を教わったり勝負に挑んだりといった交流につながりやすいだろう。

サブグラフ③には，絵本に出てくる高齢者の「優し」さに触れることで，自分から関わろうと「思える」ような，「気持ち」に訴える働きかけを意図している，【高齢者の優しさが伝わる内容が含まれていること】が示されていた。日頃，高齢者に馴染みがないと，その身体的・精神的特徴の自分との違いから，交流活動に不安を覚える幼児もいることが予想されるが，絵本を通じて高齢者は優しいというイメージを持つこ

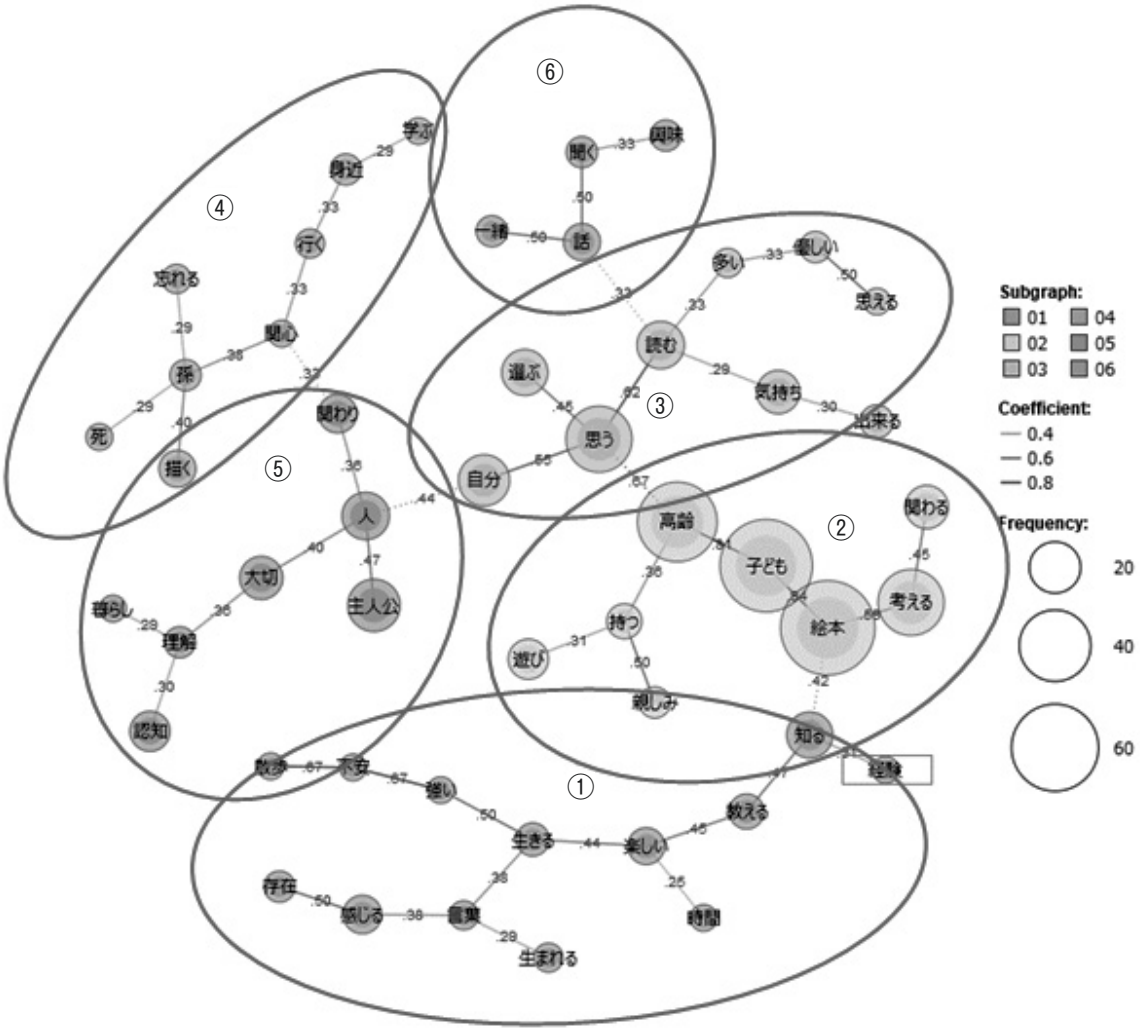

図２　幼稚園で読み聞かせるとよいと考えた絵本の選書理由についての共起ネットワーク

とで，不安を和らげることを意図したものと考えられる。

サブグラフ④には，高齢者が認知機能の衰えによりいろいろなことを「忘れる」ことがあることや，「死」に近い存在であることが，「孫」という立場から「描」かれていることが，「関心」をもって高齢者との交流に取り組んだり，高齢者を「身近」な人として認識したりすることにつながると考えていることが示された。よって，【孫の立場で老いや死に直面する内容が含まれていること】とした。このことから，学生は，幼児自身が孫として祖父母の老いや死に直面するのはもう少し先かもしれないが，だからこそ，今ある祖父母との交流の時間には限りがあることを，少しずつ自覚していくことも大切だと考えていることがうかがえる。

サブグラフ⑤には，「主人公」である子どもの視点から，「認知」症などの相手の特性を「理解」し，命や高齢者との「関わり」を「大切」にしようとする【主人公が高齢者の特性を理解しようとする姿が描かれていること】が含まれることが望ましいと考えていることが示された。世代間交流を行っている幼稚園や保育園に通う幼児は，高齢者観を聞かれると日常的に交流している養護・特養ホームの高齢者を思い浮かべるため，交流していない幼児に比べて高齢者の身体面・知識面を相対的に低く評価し，加齢による変化やその個人差を理解している割合が高いことが報告されている（王・中野，2016）。絵本の主人公に自分の姿を重ねることで，外見からは分かりにくい認知面での特徴への理解を促すことは，交流の機会が限ら

れるケースでは特に重要であると考えられる。

サブグラフ⑥には，高齢者が子どもと「一緒」に遊んだり活動をしたりする「話」を「聞く」ことで，高齢者との交流に「興味」をもつきっかけ作りができるのではないかという考えが示された。そこで，【高齢者との交流を疑似体験できる内容であること】とした。これはおそらく，交流活動の導入で，幼児が絵本のように高齢者と遊んでみたい，こんなことを一緒にしたいというような思いや願いを育むことを意識して選んだものだと考えられる。

4. 全体的考察

本研究では，幼稚園教員免許を取得予定の学生が高齢者に対しどのようなイメージを持っているのか，また，幼児が高齢者に親しみを持ち，関わりたいと思えるようにするために読み聞かせるとよいと考える絵本には，どのような内容が含まれているのかを明らかにしてきた。

特筆すべきは，学生のなかに一定数，高齢者に対し【ポジティブとネガティブ両方のイメージ】や【獲得と喪失両方のイメージ】をもつ者がいたことである。交流活動が幼児と高齢者，双方にとって意義のあるものとなるようにするためには，お互いが持ち味を発揮できるような内容を意図して計画する必要がある。よって，高齢者のことを多角的に捉え，かつ肯定的な視点を持ち合わせていることは，保育者にとって重要である。【衰えているため配慮が必要な存在だというイメージ】【身体機能が衰えているイメージ】【機能が低下して他の人の助けを必要としている存在だというイメージ】については，否定的な側面もあるものの，相手のために自分にできることを考えようとする上では欠かすことができない視点である。今後は，学生が高齢者に対して多様で肯定的なイメージを持てるような授業の在り方について検討していきたい。

交流活動と関連して幼児に読み聞かせる絵本の選書理由としては，【共に楽しい時間を過ごす中で高齢者から学びを得る内容が含まれること】【高齢者との交流の核となる遊びが含まれていること】【高齢者との交流を疑似体験できる内容であること】のように，具体的な交流活動に目を向けることを意図したもの，【高齢者の優しさが伝わる内容が含まれていること】のように，馴染みの薄い相手への不安を和らげることを意図したもの，【孫の立場で老いや死に直面する内容が含まれていること】【主人公が高齢者の特性を理解しようとする姿が描かれていること】のように，老いや死について考えることを意図したものが挙げられた。今後は，それぞれの学生が，幼児の実態や活動計画に合わせて適切な絵本を選べるようリストを共有し，実践場面での絵本の効果の検討を行いたい。

引用文献

青木聡子（2022）幼児と高齢者の交流における絵本の活用についての一考察　初等教育論集（国士舘大学初等教育学会）23，80-93.

青木聡子（2023）幼児が高齢者に親しみを持つための絵本の活用Ⅱ　初等教育論集（国士舘大学初等教育学会）24，53-62.

畔津忠博・金　恵媛・吉永敦征（2017）大学生が抱く高齢者イメージに関する日韓比較：多主体間の長寿文化共有の試み　山口県立大学学術情報（山口県立大学）10 123-130.

畔津忠博・金　恵媛・吉永敦征（2018）高齢者との接触経験が若者の高齢者像の生成に及ぼす影響に関する日韓比較山口県立大学学術情報（山口県立大学）11，67-73.

福江里美・福岡欣治・荒井佐和子（2020）過去の祖父母機能が大学生の心理的発達と高齢者イメージに及ぼす影響　川崎医療福祉学会誌 30（1-1），95-107.

樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析［第 2 版］：内容分析の継承と発展を目指して　ナカニシヤ出版.

細田武伸・穆　浩生・横山弥枝・徳嶋靖子・大西一成・大谷眞二・黒沢洋一（2014）医学生の考える高齢者像についての分析：鳥取大学学生の調査より　鳥取大学教育研究論集（鳥取大学大学教育支援機構教員養成センター）4 121-126.

一原由美子・波止千恵・梅﨑節子・山田美幸（2018）地域の高齢者と大学生による異世代間交流　純真学園大学雑誌（純真学園大学）(7) 9-13.

小嶋洋一・孫　子涵・中嵜大貴・劉　華霏・弘津公子・徳田和央・長谷川真司・吉村耕一（2022）大学生の持つ高齢者イメージとその影響要因　山口県立大学学術情報（山口県立大学学術情報）15 53-63.

松山礼子・安永正史・草野 篤子（2014）大学生の高齢者イメージ　日本世代間交流学会誌 4（1）, 117-122.
三輪のり子・金原京子（2015）ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴：「普段みたり聞いたりする像」「将来なりたい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く　老年看護学 19（2）, 47-57.
文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説平成 30 年 3 月　フレーベル館.
内閣府（2018）高齢社会大綱 https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p_honbun_h29.pdf（2022 年 12 月 8 日アクセス）
内閣府（2023）令和 5 年版高齢社会白書 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/html/zenbun/S1_1_1.html（2023 年 12 月 1 日アクセス）
南﨑眞綾･佐々木晶世･叶谷由佳（2023）老年看護学教育における認知症一人称体験が看護学生のエイジズムと高齢者イメージに与える影響　日本健康医学会雑誌 32（2）, 193-199.
王　姿月・中野いく子（2016）世代間交流が 幼児の高齢者観に及ぼす影響　日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 27（0）, 86-96.
太田裕子（2018）領域「人間関係」に関する保育内容についての意識調査 －保育者養成課程の短大生と保育者を対象として－　羽陽学園短期大学紀要（羽陽学園短期大学）10（4）, 13-23.
坂井 智明（2018）スポーツ健康学系大学生が抱く高齢者のイメージ　名古屋学院大学論集医学･健康科学･スポーツ科学篇 7（1）, 1-9.
鈴木宏幸・小川　将（2014）大学生が抱く高齢者イメージの心像性と祖父母との被支援的接触頻度の関連 日本世代間交流学会誌 4（1）, 55-60.
徳田多佳子･請川滋大（2021）幼児を高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容　日本女子大学大学院紀要家政学研究科･人間生活学研究科（27）, 165 173.

謝辞　調査にご協力くださいました学生の皆さまに，深く感謝申し上げます。